

**A maternal high salt diet disturbs cardiac and vascular function of offspring.**

Maruyama, K., Kagota, S., Van Vliet, B.N., Wakuda, H., Shinozuka, K.

*Life Sci.*, **136**, 42-51 (2015)

高血圧自然発症ラットを用いて、妊娠及び授乳期の食塩過剰摂取は、仔の循環機能を低下させることを明らかとし、母体の食習慣の重要性を示した。

**Differential effects of mitogen-activated protein kinase pathway inhibitors on P-glycoprotein activation.**

Wakuda H, Miyauchi S, Maruyama K, Kagota S, Nakamura K, Umegaki K, Yamada S, Shinozuka K.

*ADMET & DMPK*, **3**, 77-83 (2015)

p38-MAPK経路はP-糖タンパク質の即時的な調節に関与せず、SB203580はp38-MAPK経路以外のメカニズムでP-糖タンパク質機能を促進する事が示唆された。

**Anticancer and antimetastatic effects of cordycepin, an active component of Cordyceps sinensis**

Nakamura K, Shinozuka K, Yoshikawa N.

*Journal of Pharmacological Sciences*, **127**, 53-56 (2015)

冬虫夏草の活性成分であるコーディセピンの抗がん作用とがん転移抑制作用を筆者等の研究成果を中心に総説にまとめた。

**阪神パークのチンパンジー。**

落合知美, 池田克巳, 蓬田健太郎

武庫川女子大学紀要 (自然科学編), **61**, 印刷中 (2015)

日本の動物園黎明期のチンパンジーの展示動物の位置づけと展示施設の意義について、阪神パークを事例として検討したもの。

**Orally administered mucolytic drug L-carbocysteine inhibits angiogenesis and tumor growth in mice.**

Shinya T, Yokota T, Nakayama S, Oki S, Mutoh J, Takahashi S, Sato K.

*J. Pharmacol. Exp. Ther.* **354**, 269-278 (2015)

L-カルボシステインは、血管内皮細胞の増殖、遊走および管腔形成を抑制し、in vivo血管新生および抗腫瘍効果を示すことを見出した。

**Inhibition of the proliferation and acceleration of migration of vascular endothelial cells by increased cysteine-rich motor neuron 1.**

Nakashima Y, Morimoto M, Toda K, Shinya T, Sato K, Takahashi S.

*Biochem. Biophys. Res. Commun.* **462**, 215-220 (2015)

血管内皮細胞において、CRIM1は細胞増殖を抑制し、細胞遊走および管腔状の形態変化を誘導することにより、内皮細胞の管腔形成を促進することが示された。

**Transactivation of the human retinoid X receptor by organotins: use of site-directed mutagenesis to identify critical amino acid residues for organotin-induced transactivation.**

Hiomori Y, Aoki A, Nishikawa J, Nagase H, Nakanishi T.

*Metallomics*, **7**, 1180-1188 (2015)

レチノイドX受容体の点変異体を作製し、有機スズ化合物による転写活性化に重要な役割を果たすアミノ酸残基を明らかにした。

**Structural basis for PPAR $\gamma$  transactivation by endocrine-disrupting organotin compounds.**

Harada S, Hiomori H, Nakamura S, Kawahara K, Fukakusa S, Maruno T, Moda M, Fukui K, Nishikawa J, Nagase H, Kobayashi Y, Yoshida T, Ohkubo T, Nakanishi T.

*Sci. Rep.*, **5**, 8520 (2015)

ペルオキシソーム増殖剤活性化受容体と有機スズ化合物の共結晶を作製し、X線構造解析によりリガンド依存的な転写活性化の構造的な基盤を明らかにした。

**Associations between ALDH2 and ADH1B genotypes and ethanol-induced cutaneous erythema in young Japanese women.**

林田真梨子, 鎌田由佳, 大田智子, 児島沙由梨, 増見恭子, 村田成範, 木下健司.

日本衛生学雑誌, **70**, 134-138 (2015)

アルコール代謝遺伝子として重要な役割をしているALDH2とADH1B遺伝子について、遺伝子多型のタイプを遺伝子検査により判定し、アルコールパッチテストによる判定とアルコール接触による紅潮反応と遺伝子型の関連性を解析した。解析対象は健常者として20歳前後の女性、約千人を被験者とした結果、非常に良好な相関関係が見出され、若年者を対象としたアルコール飲酒教育および体質と遺伝に関する教育に用いるツールとして有用であることが示唆された。

**乾燥唾液を用いたアルコール代謝関連遺伝子ADH1B及びALDH2のSNPタイピング解析法の検証実験と妥当性確認.**

村田成範, 林田真梨子, 石黒裕子, 今関ひろみ, 林恵美子, 横山顕, 木下健司.

日本臨床, **63** (11), 1253-1258 (2015)

本研究室で開発した、唾液を水溶紙に採取して直接Taqmanアッセイに用いる遺伝子解析法の検証実験を行った。同じ被験者のサンプルを用いて、国立病院機構久里浜医療センターでは旧来の実験法であるPCR-RFLP法で解析を行い、当研究室では独自に開発した実験法で解析を行い、両者のデータを照合した結果、全て一致する結果を得た。またアルコール依存症患者のサンプルを用いたので、遺伝子タイプの偏りと病気の関連性について妥当であるかどうかの確認を行ったところ、既報の論文と齟齬は無かった。アルコールに対する正しい知識を身につける目

的で、簡便に遺伝子を知ることの社会的意義を確認できた。

**Fluoxetine and its novel effect on adult neurogenesis.**

Koji Ohira.

In: Pinna G (ed). *Fluoxetine: Pharmacology, Mechanisms of Action and Potential Side Effects*. NOVA Science Publishers: New York, 97-106 (2015)

抗うつ薬の一つであるフルオキセチンの新しい中枢作用として大脳皮質の成体神経新生を促進することについてまとめた。

**神経再生.**

大平耕司.

脳神経外科医が知っておくべきニューロサイエンスの知識, 橋本信夫 (監修), 三國信啓, 深谷親 (編集), 光文堂, 東京, 40-41. (2015)

神経再生についての最近の知見について、脳外科医向けの教科書野中の一つのトピックとしてまとめた。

**Molecular characterization of human thyroid hormone receptor  $\beta$  isoform 4.**

Moriyama K, Yamamoto H, Futawaka K, Atake A, Kasahara M, Tagami T.

*Endocrine Research*. **29**, 1-9 (2015)

甲状腺受容体のアイソフォームである $\beta$ 4を発見し、その機能的解析を行った。

**Cinnamaldehyde Contributes to Insulin Sensitivity by Activating PPAR  $\delta$ , PPAR  $\gamma$ , and RXR.**

Li JE, Futawaka K, Yamamoto H, Kasahara M, Tagami T, Liu TH, Moriyama K.

*American journal Chinese Medicine*. **43** (5), 879-92 (2015)

糖尿病や血糖改善効果を示すハーブ主成分について分子生物学的検討を行った。

### 日本におけるチンパンジー (*Pan troglodytes*)

#### 飼育の初期の歴史 1920-1950年.

落合知美, 綿貫宏史朗, 鶴殿俊史, 森村成樹,  
平田 聡, 友永雅己, 伊谷原一, 松沢哲郎.

霊長類研究, **31**, 19-29 (2015)

第2次世界大戦前に日本に輸入されたチンパンジーについて、飼育施設への訪問や郷土資料の調査などから明らかにし、日本での飼育初期における飼育記録の整理を試みた。

### ちびっこチンパンジーと仲間たち (第167回)

#### データベースから考える、チンパンジーの幸せな暮らし.

綿貫宏史朗, 落合知美, 岩原真利, 平田 聡,  
森村成樹, 友永雅己, 伊谷原一, 松沢哲郎.

科学, **85**, 1108-1109 (2015)

日本に住む大型類人猿の「戸籍」作りである文部科学省の事業の1つ、大型類人猿情報ネットワーク (GAIN) についての紹介と、そのデータベースから明らかになる少子高齢化と医学感染実験の廃止について紹介した。